

アーラヤ識縁起説における増益と損減

——『秘義分別撰疏』の考察（7）——

千葉 公 慈

Samāropa and Apavāda, in Thought of Pratīya-samutpāda based on Ālayavijñāna

—— A Study about *Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā* (7) ——

Koji CHIBA

1. 問題の所在

本稿は、インドの瑜伽行唯識学派における代表的典籍である『撰大乘論』(Mahāyāna-saṃgraha、以下MSと略称)に対する重要な注釈書、『秘義分別撰疏』(Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā^{*1}、以下VGPVと略称)を考察の対象とするものである。すなわち唯識学派におけるアーラヤ識設定の隠された意味とその思想を開示せしめる貴重な手がかりを探るためにVGPVに関するチベット語訳デルゲ版(No. 4052)を底本として選択し、既に6回にわたって継続的に現代語訳^{*2}を試みたその続編である。

2. 仏語性の根拠としての「大菩提」

前回の拙論において指摘した重要な箇所をごく簡潔に述べれば、VGPVの著者自身が拠って立つ大乘經典の仏語性の根拠を「大菩提(mahā-bodhi)の成就」というその一点のみに置いていることである。すなわち菩提のあり方を個別的思考の対象から離脱せしめ、遂には共通認識の対象として実在する基盤と位置づけて、「真如(tathatā)にして無垢なるもの(amala)」と定義するのである。これらに関して「無垢真如」および「無垢空性」として言及するならば、『中辺分別論(Madhyānta-vibhāga-śāstra、以下MAVと略称)』第1章第15、16偈、および第2章、第3章などを参照しなければならない。こ

*1 Don gsang ba rnam par phye ba bsdu te bshad pa (Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā) : Vivṛtti-in Derge ed. Vivṛta-in Peking ed.

*2 拙論『『秘義分別撰疏』覚え書(1)』駒沢女子大学研究紀要・第8号所収、pp. 209-216

同『『秘義分別撰疏』覚え書(2)』日本文化研究(駒沢女子大学日本文化研究所)・第4号所収、pp. 117-131

同『如来の所分別についての一考察—『秘義分別撰疏』覚え書(3)』駒沢女子大学研究紀要・第9号所収、pp. 199-210

同『『秘義分別撰疏』における真如観について』平成15年度日本印度学仏教学会第54回学術大会(佛教大学)、2003.9.6、『印度学仏教学研究』第52巻所収。pp. 373-376

同『所分別と三昧についての一考察—『秘義分別撰疏』覚え書(4)』駒沢女子短期大学研究紀要・第37号所収、pp. 79-85

同『唯識説における Buddha-vacanātva について—『秘義分別撰疏』の考察(5)—』駒沢女子大学研究紀要・第11号所収、pp. 131-140

同『『秘義分別撰疏』の考察(6)—』駒沢女子大学研究紀要・第12号所収、pp. 107-117

ここではひとまず MAV の第 1 章における「空性の同義語」と「空性の分類」の節について確認する。

ananyathā-’viparyāsa-tan-nirodhārya-gocaraiḥ/
hetutvāc cārya-dharmmāṇaṃ paryāyār-
tho yathā-kramaṃ// I .15

変化しないこと、倒錯していないこと、それが減していること、聖者の〔認識する〕対象領域であることによって、また聖なる法の因であることによって、順次に同義語の意味が〔知られるべきで〕ある。

(MAV 第 1 章第15 偈)

saṃkliṣṭā ca viśuddhā ca/ I .16a
samalā nirmmalā ca sā/ I .16b
abdhātu-kanakakāśa-śuddhivac cahudd-
hir iṣyate// I .16cd

雑染された〔空性〕があり、また清浄にされた〔空性〕がある。
それはまた垢れをともなうものであり、また垢れを離れたものである。
水界や黄金や虚空が清浄であるのと同様に、〔本来的に〕清浄であると考えられるからである。

(MAV 第 1 章第16 偈)

これらの世親 (Vasubandhu、天親：320年～400年頃) による長行を見ると、第15偈の箇所では空性は「常にそのまま（如）にある」という理由から「変化しないこと」であり、空性は真如と同義語であると定義されている。また分

別の対象となるような存在ではないので「倒錯すること」はあり得ず、無倒錯であるから極限的な実在であるという。また因果関係の特徴と定義づけを離れているので「相（特徴）が減している」、あるいは「無相」と表現する。さらに第16偈の長行によると、空性は雑染をともなう存在でもあり、雑染をともなわない存在でもあるのに無常なものではないことの理由として、偶然的、外来的な客塵 (āgantuka) 煩惱を取り除くことによって、何時でも本来的な清浄が回復されるのであると説明する*3。故に空性の定義において有為と無為の区別はなく、変化もないことになるのである。この点は、今回の VGPV における訳出箇所の増益と損減とに深く関連する問題点である。

こうして有垢なる諸法が如何に展開されようとも、それらはあくまでも客塵的であり本来的な存在ではなく、一方で唯一絶対の基盤としての受け皿である無垢の「大菩提 (mahā-bodhi)」の存在のみによって菩提が証明されるのである。そしてその独自性によってのみ仏語性を証明する根拠となり得るとの主張に至り、結果として「無住処涅槃 (a-pratiṣṭhita-nirvāṇa)」と「三身〔説〕 (tri-kāya)」を「大菩提 (mahā-bodhi)」の段階だけに限定づける特質として示し、自説の優位性を説くのである (Der ed, 302a5～6)。

さらにこれらの主張の具体的な根拠として、MS 本文の①「甚だ理に適ったこと (sūpapanna)」、②「一致すること (aukāla)」、③「矛盾のないこと (aviruddha)」という 3 つのキーワードを原因と結果という因果関係から説明する。すなわち「甚だ理に適ったこと」とは、諸法の実体的基盤が原因となり、結果として諸法が現れるのは甚だ理に適った特質であり、「一致する

*3 長尾雅人『大乘仏典15・世親論集』中央公論社、pp. 233-236

Gadjin M. Nagao ed, “Madhyāntavibhāga-bhāṣya” Suzuki Resaearch Foundation, pp. 23-24

こと」とは、言葉ではなく実践を本質とすること自体を原因とするものであり、結果として六波羅蜜に一致している特質を指す。また「矛盾のないこと」とは、煩惱と菩提との関係において、何時如何なる事態においても結果だけは保証されている「大菩提」が「殊勝なるあり方である慧」として控えている限り、あらゆる原因が存在しようとも一つの結果に収斂されるので矛盾は起こり得ないという (Der ed, 302b1~2)。

このようにある意味で危険な弁証法的展開は、三性説における①「甚だ理に適ったこと」については、常に菩提へ向かわしめるあり方である限り、判断根拠に誤りの可能性は存在しないので理に適っていることになり、②「一致すること」については、如何なる不清浄な存在であれ、収斂される限りは清浄な側面と常に一致しているのであり、③「矛盾のないこと」については、如何なる言説が述べられようとも矛盾があり得ないことを説き、ここで明確に言語を否定して体験重視の立場をとることを宣言している (Der ed, 302b3~4)。

続く認識根拠においては、①「甚だ理に適ったこと」については、MSの「十種の道理」が現量に即しているので理に適っており、②「一致すること」については、比量に一致しているから、そして③「矛盾のないこと」については、聖言量と矛盾しないからという解説を加えていた (Der ed, 302b4~5)。以下同様に、三諦、三阿僧企耶劫、種姓についてそれぞれ3つの根拠を結びつけて解釈するのである。このうち三諦の段階に触れている点は、VGPVの著者が唯識派の中でも従来知られている系統とは別な流れにあることを示唆するものと知られたのであった (Der ed, 302b6)。

このほかに前回の訳出における後半部分としては、MS全体の章分けに関する解説が丁寧

示されていた。すなわち因果関係の視点からはその順序を解釈し、三学と十地の視点からはその概要を大別し、四諦説の視点からは無住処涅槃への次第を結びつけていたのであるが、そのいずれもがMS本文に見ることの出来ない詳細な内容であった。

以上の論理展開における問題点をさらに究明するため、以下にその後に続く試訳を提示するものである。

3. VGPV 試訳

凡 例

- 1) 試訳の底本は以下のデルゲ版を使用し、補足的に必要に応じて北京版を利用した。

Der. ed., No. 4052, Ri, 296-b-1~361-a-7
: Tibetan Tripittaka, bstan 'gyur,
preserved at the Faculty of Letters,
University of Tokyo,
SENMS TSAM Vol. 12, 通帙第
236 (Ri)

Pek. ed., No. 5553, Li, 356-b-7~434-a-8

- 2) 固有名詞ならびに通常音写語として用いられる術語は、カタカナ表記とする。
- 3) 本書のテキストMS中にて言及されている部分は、「」によって示した。
- 4) 重要な術語は、() によってチベット訳を示した。また未確認ではあるが、おそらく誤りではなからうと思われる還元のサンスクリット語についても、正確な文脈を把握するため、同様に () によって示した。
- 5) 原文にはないが、補った方が理解に便と思われる言葉は [] によって示した。
- 6) 典籍一般は、『 』によって示した。
- 7) なるべく原文に忠実な直訳を試み、日本

語として不自然な文章箇所も []
によって整え、敢えてそのままの表現を残した。

[from Der. ed, No. 4052, Ri, 303-b-3]

【1】十二縁起に対するアーラヤ識縁起の優先性について

[MS における十種の殊勝なる道理について、十地と三学と四諦説の視点から、その次第の説示が今まさに終わった。したがってここからは、MS の] 造論者でいらっしゃる無着尊者 (Asaṅga、無著：310年～390年頃) は [MS の各章について] 次第を [先述の説明とは] 別途にお示し給うために、[MS 第5章の第1節において] 「諸法の因について熟練することに依存して云々」と説かれたのであって、[原因が存在しないという] 無因と [原因はあっても適切でないことを原因としてしまうという] 相違因が完全に断じられるが故に*4、因に対して熟練するのである。それ故に「知られるべきものの拠り所」が示されたのである。何故ならば一切法はアーラヤ識に依存しているからである。

[その同じ MS 第5章の第1節において] 「縁起に対して熟練 [すべき]」と説かれたことについて言えば、愛 (iṣṭa-gati) と非愛 (dur-gati) との趣*5 を詳細に分析し、享受する (upabhoga) [主体者側の] 縁起が示されるからである。「因に対して通暁する」と言われるものが [MS に] 説かれたことについて言えば、自性を

[詳細に] 分別する者の側 [にとって] の縁起が明らかに示すためであり、ここでさらに [MS 第2章として] 他のもの*6 についての熟練知 [が説かれていることについて言えば、それ] は自性を詳細に分析している*7 縁起 (アーラヤ識縁起) に関する熟練知が [従来の十二支縁起に関する熟練知よりも] 先行する [ものとして説かれている] のであるから、故に [十二支] 縁起についての熟練知として [アーラヤ識縁起の] 後に示されたのである*8。それ (アーラヤ識) に続いて縁起について通暁するならば、諸法の特質に悟入することが出来るのであるから、「知られるべきものの特質」[としてアーラヤ識] が示されるのである。

【2】三自性における増益と損減の意味について

[MS 第5章の第2節において] 「増益と損減という極端なる過失が完全に断じられること」と言われるその中で、遍計所執 [性] に関して増益することは、[あたかも] 毘婆娑師 (vaibhāṣika) などの如き者たち [の犯す過失と同様] である。何故ならば、色等について真実 (tattva) に [存在する] と主張命題を立てているからである。依他起 [性] に関して損減することは、[過失である。何故ならば] あらゆる本体として [我が] 仮設 (設定) されている*9 ところの基盤 (アーラヤ識) [まで] をも断じてしまうからである。円成実 [性] に関して損減することもまた、[過失である。何故ならば] 決定的に無と分別する [断見に陥る] か、あるいは世俗として

*4 無因は nir-hetu か。本来的に原因が存在しないこと。一方の相違因は virodha-hetu で、あるものが生まれ、存続し、成立して得られると言う場合に障害となる原因をいい、十因の一つにあげられる。

*5 善趣と悪趣。可愛趣と非愛趣。

*6 ここで説くアーラヤ識縁起とは別なものとして、従来の十二支縁起を指しているが、「他のもの」と表現する程度に十二支縁起を示すのは、VGPV 著者の本音が覗える。

*7 svabhāva-vibhāvika

*8 MS 第1章の第19節において二種の縁起説が説かれている。Lamotte ed, p. 11参照のこと。こうして従来の十二支縁起説とアーラヤ識縁起説の両者のうち、明確に後者を重視していることが明らかとなった。

*9 我たるもの、本性的なものとしてアーラヤ識が重視されている箇所。

有と分別する「常見に陥るかのいずれかになってしまう」からである。その中で、「円成実性とは」一方的に無ではないのである。何故ならば、真如 (tathatā) は実在を性質としているからである。概念的な仮設なしには、仮設そのもののあり方について空 (śūnya) であるという真如「について」は、確定して理解することが不可能なのである。「あたかも」無常性などの如く概念的に設定された存在でもないのであって、何故ならば、それら^{*10}は暫定的な状態の区別において設定されたものであるために迷乱するからであり、一方で真如は、あらゆる段階「の区別においても」迷乱しないからである。したがって「それらは」堅固なものであるから、実体的なものであるのであって、実在としての法であるために「無そのもの」でもないのである。実にその通りであるならば、「同様に」遍計所執「性」に関して増益を犯すことが出来ないから、また依他起「性」と円成実「性」に関して損減を犯すことが出来ないから、「故に」増益と損減という過失が「三性において」正に断じられたのである。

あるいは3つの各々の自性（三性）においてもまた、増益と損減という過失を正に断じることが結びつけられて「考えられて」いるのであって、その中で遍計所執「性」に関して増益すること、そのことは先述の通りである^{*11}。「遍計所執性に関して」損減することは、世俗としても除かれるべきことだからである。依他起「性」に関して増益することは、「あたかも」経量部などの如き者たち「の犯す過失と同様」である。

何故ならば、「諸法が」真実 (tattva) のみとして「存在する」と主張命題を立てているからである^{*12}。というのも、心・心所等は等質であり続ける状態のあり方を離れているから、真実を本質とするものとしては成立することが出来ないが、それは世間の言葉によれば、根拠なしには判断が不可能なのであるから、因縁性としてただ単に主張命題が立てられているに過ぎないのである。色は世間の言葉によれば、「どこまでも世俗的な言葉の営みであるから」心・心所より他に存在すると判断されているのであって、「そこでは」有と理解されているのである。何故ならば夢 (svapna) などにおいては迷乱が起きるからであり、また深く考察すること (su-niścitam) には耐えられないからである。「したがって」縁起性であることが「経量部においては」排除されるのである^{*13}。「依他起性において」損減することは、先述の通り^{*14}に言葉が繋げられるのである。円成実「性」において増益することは、言語表現が真実のままに真実として完全に理解されるためである。「一方で円成実性において」損減することは、先述の通り^{*15}である。他の者たちは依他起「性」における増益のことを「他の世間的な増益」と同様に説明するのである。何故ならば、「あたかも」能取する本質として広く一般にも承認されているように、「有に對して」執着しているからではあるが、存在するからこそ所取と能取について離れている (viveka)^{*16}本質として「増益している」のではないのであって、真実のままに（正にそのよう

^{*10} ここでの「それら」とは、三性のうちの依他起性と円成実性の両者を指すか、あるいは無常性などを意味するか不明。後述を見れば前者とも考えられるが、この一文を見る限り、おそらく後者ではないか。

^{*11} VGPV：303b7の前半の箇所を指す。

^{*12} 「真実のみが存在するというのもない」ということが重要であって、もしも真実のみの存在を承認してしまったら経量部と同様になってしまうのではないか、というほどの意味。

^{*13} 唯識派にとって経量部は、縁起という依他起における増益を犯しているという意味。

^{*14} VGPV：303b7の中頃の箇所を指す。

^{*15} VGPV：303b7の後半から304a1までの箇所を指す。

に) 増益するが故に「依他起性における」増益なのである、と言われる。

【3】三自性の定義づけについて

〔MS 第5章の第2節において〕「それらの縁起した諸法において云々」と言われることによって、ここに論難〔が認められる〕。もしも諸々の縁起において増益と損減が正に断じられることによって、〔諸法の〕特質について熟練するのであるならば、遍計所執〔性〕と円成実〔性〕の両者について熟練することを扱う箇所としては、一体どのような状況に当てはまるのかと言えば、一つ(遍計所執性)は非存在性によって縁起ではないからであり、他方、真如の特質(円成実性)も常住(永久)だからである、と〔論難者が〕言うならば、それは「適当」ではないのである。何故ならば〔MSに〕「特質について熟練すること」と言って説かれる「特質」とは、これ(特質それ自体)によって定義づけられるものであるからである。〔したがって〕依他起〔性というある場所〕において遍計所執〔性が存在するか否かで依他起性自身が定義づけられるの〕であり、円成実〔性が存在するか否かで依他起性自身が定義づけられる〕ということなのである。何故ならば、諸々の不浄なる衆生によ

っては遍計所執性として〔定義づけられ、あるいは諸々の衆生が〕清浄であることなどによっては無我を本質とするものとして〔明確に三性のうちの遍計所執性と円成実性とによって〕特徴づけるのである^{*17}。〔したがって〕依他起〔性〕それ自身は特質づけられるべきもの^{*18}であるから、か(前文)の定義は真如と結びつけられ〔て定義され〕るべきものである。

【4】四重二諦における増益と損減

ここで、一切の世俗の四諦と、勝義の四諦がある^{*19}。そのうち(イ)世間世俗〔諦〕としては、遍計所執〔性〕について増益せず、損減しないことである。(ロ)道理世俗〔諦〕としては、心・心所を本質としているところの依他起〔性という場所〕において増益せず、損減しないことである。(ハ)証得世俗〔諦〕としては、諦(真実)の立場を規定する通りに執着すること、〔正に〕そのことによって増益もしないが、現観(abhisamaya)^{*20}と一致することはないとして、損減もしないことである。(ニ)勝義世俗諦としては、あたかも言語表現されるが如くに円成実〔性〕として増益することなく、損減することもないのであって、同様に(イ)世間勝義〔諦〕と、(ロ)道理勝義〔諦〕と、(ハ)証得勝義〔諦〕

^{*16} 'dzin pas dben pa は具格に√vicが伴っている形であるから、「～から離れている」、「～について区別する」、「～に関して空寂である」という欠落を意味する文脈となる。

^{*17} 定義とは、定義自身によって定義づけられる、という意味。「mtshon pa」は「定義づけるもの」であり、「mtshan nyid」は「定義づけられるもの」、すなわち「定義するその対象」となるから、遍計所執性と円成実性は定義づけるものとなり、依他起性は定義づけられるものという関係として両者が整理されている。つまり依他起性は遍計所執性と円成実性の二自性とは明確に区別されて、定義づけの場所であることが述べられている。おそらくこうした理解がアーヤ識縁起の思想的構造を導くのである。またこの箇所では、縁起の特質に通暁することによって初めて三性説の思想的特質と定義が理解できる、とも主張している。

^{*18} mtshon par bya ba について確認すれば以下の通り。AK II.50参照。
mtshon bya 所相、所表 lakṣya 特質(表現)づけられるべきもの
mtshon byed 能相、能表 lakṣaṇa 特質(表現)づけるもの

^{*19} 『成唯識論』巻9によれば、法相宗の四真四俗は世間世俗諦、道理世俗諦、証得世俗諦、勝義世俗諦、世間勝義諦、道理勝義諦、証得勝義諦、勝義勝義諦の「四重二諦」の説が説かれている。

^{*20} 現観とははっきりと真理を知ること。完全なる理解。現前に真理について、明瞭に観察すること。『俱舍論』第22巻1—2、第23巻11—12等。『撰大乘論』大正蔵31巻 p. 328b 参照。有部によると現観は聖諦現観を指し、正観ともいうもので、詳細には六現観を設定している。

と、(に)勝義勝義[諦]とによって、真実(tattva)
[として]あるがままに増益と損減をまさに断じ
ることが結びつけられるべきである。(未完)

4. VGPV 藏文

[Der. ed, No. 4052, Ri, 303-b-3 Pek. ed, No.
5553, Li, 364-b-8]

【1】

bstan bcos mdzad pas ni go rims gzhan du
bstan pa'i phyir chos rnam kyī rgyu la
mkhas pa^{*21} la brten nas zhes bya ba la sogs
pa smos te. rgyu med pa dang mi mthun pa'i
rgyu^{*22} yongs su spangs pa'i phyir rgyu la
mkhas pa'o. de'i ched du shes bya'i gnas bstan
te. chos thams cad ni kun gzhi rnam par shes
pa^{*23} la rag las pa'i phyir ro. rten ci pa 'brel
par 'byung ba la mkhas par^{*24} zhes bya ba ni
sdug pa^{*25} dang mi sdug pa'i 'gro ba^{*26} rnam
par 'byed ba dang nye bar spyod pa^{*27} pa'i
rjen cing 'brel bar [b-5] 'byung ba bstan pa'
i phyir ro. rgyul mkhas pa zhes bya ba smos
ba ni ngo bo nyid rnam par 'byed pa pa'i rten

cing 'brel par 'byung ba rab tu bstan pa'i
phyir te. 'dir yang gzhen la mkhas pa ni ngo
bo nyid rnam par 'byed pa pa'i rten cing 'brel
par 'byung ba mkhas pa sngon du 'gro ba cad
yin pa'i phyir rten cing 'brel par 'byung ba la
mkhas par phyis bstan to. de'i 'og tu rten cing
'brel par 'byung ba la mkhas na chos rnam
kyi mtshan nyid la 'jug par nus bas shes bya'
i mtshan nyid bstan to.

【2】

sgro 'dogs pa dang skur pa'i mtha'i nyes pa
yongs su sbangs pa^{*28} zhes bya ba de la kun
[b-7] brtags la sgro 'dogs pa ni bye brag tu
smra ba^{*29} la sogs pa rta bu ste. gzugs la sogs
pa la de kho na nyid du khas len pa'i^{*30} phyir
ro. gzhan gyi dbang la skur pa 'debs pa ni
bdag nyid thams cad du gdags pa'i gzhi spang
ba'i phyir ro. yong su grub pa la skur ba 'debs
pa yang kha [Der. ed, 304-a-1] cig tu^{*31} med
par rtogs pa 'am kun rdzob^{*32} tu yod par
rtogs pa'i phyir ro. re zhig^{*33} gcig tu ed pa ni
ma yin te. de bzhin nyid rdzas^{*34} kyī chos yin
pa'i phyir ro. gdags pa'i^{*35} nye bar len pa^{*36}

*21 mkhas pa...kauśalyam

*22 mi mthun pa'i rgyu...virodha-hetu

*23 kun gzhi rnam par shes pa...ālaya-vijñāna

*24 par...bya in Pek ed.

*25 sdug pa...iṣṭa-gati

*26 mi sdug pa'i 'gro ba...dur-gati

*27 nye bar spyod pa...upabhoga

*28 sgro 'dogs pa dang skur pa'i mtha'i nyes pa yongs su sbangs pa in Der ed and Pek ed...sgro 'dogs pa dang skur pa
'debs pa'i mtha'i nyes pa yongs su sbangs pa in MS

*29 bye brag tu smra ba...vaibhaṣika

*30 khas len pa...abhi-upagam

*31 cig tu...gcig tu in Pek ed.

*32 kun rdzob...saṃvṛtti

*33 re zhig...tāvat

*34 rdzas...dravya

*35 gdags pa...prajñapti

*36 nye bar len pa...upacāra

med par ni btags pa'i^{*37} ngo bos stong pa'i de
zhin nyid nges par gzung [a-2] bar^{*38} mi nus
so. mi rtag pa nyid la sogs pa bzhin du btags
pa'i yod pa yang ma yin te. de dag ni gnas
skabs kyi bye brag la btags pas 'khrul pa'i^{*39}
phyir la de bzhin nyid ni gnas skabs thams
cad du mi 'khrul pa'i phyir ro. de bas na bstan
ba'i^{*40} phyir rdzas yin la rdzas [a-3] kyi^{*41}
chos yin pa'i phyir med pa nyid kyang ma yin
no. de ltar na^{*42} brtags pa la sgro 'dogs par
mi byed pa'i phyir dang gzhan gyi dbang dang
yongs su grub ba dag la skur pa 'debs par mi
byed pa'i phyir sgro 'dogs pa dang skur pa'i
nyes pa^{*43} sbangs pa nyid do. yang na ngo bo
nyid re rel yang sgro 'dogs pa [a-4] dang
skur pa'i nyes pa sbangs pa nyid byar te de
del brtags pal sgro 'dogs pa nyid snga ma
bzhin no. skur pa 'debs pa ni thams cad kyi
thams cad du^{*44} kun rdzob tu yang sel ba'i
phyir ro. gzhan gyi dbang la sgro 'dogs pa ni
mdo sde pa la sogs pa lta bu ste. de kho na
nyid kho nar khas len pa'i [a-5] phyir ro. 'di
tar sems dang sems las byung ba rnam rigs
mthun pa'i dngos po dang bral ba'i phyir de
kho na'i bdag nyid du ni bsgrub par ni mi nus

kyi^{*45} de ni 'jig rten gyi tha snyad^{*46} kyis gzhi
med par ma gtags pas rten cing 'brel pa nyid
du khas blang ba 'ba' zhig tu zad do. gzugs [a
-6] ni 'jig rten gyi tha snyad kyis sems dang
semas las byung ba las gud na^{*47} yod par
brtags te. rmi lam^{*48} la sogs pa la 'khrul pa'
i phyir dang shin tu brtags^{*49} mi bzod pa'i
phyir rten cing 'brel par 'byung ba nyid yin pa
bsal lo. skur pa 'debs pa ni snga ma bzhin
sbyar ro. yong su grub pa la sgro 'dogs pa ni
ji ltar brjod pa de kho na bzhin du de kho na
nyid du yongs su 'dzin pa'i phyir ro. skur pa '
debs pa ni snga ma bzhin no. gzhan dag ni
gzhan gyi dbang la sgro 'dogs pa bzhin du '
chad de. ji ltar 'dzin pa'i bdag nyid du grags
pa de ltar mngon par zhen pa'i [Der. ed, 304
-b-1] phyir yin gyi yod pa'i phyir gzung ba
dang 'dzin bas dben pa'i^{*50} bdag nyid du ni ma
yin te. de ltar sgro 'dogs pa'i phyir sgro 'dogs
pa yin no zhes so.

【 3 】

rten cing 'brel par 'byung ba'i chos de dag la
zhes bya bas 'dir brgal ba^{*51} gal te rten cing
'brel par 'byung ba dag la sgro 'dogs pa dang

*37 btags pa...brtags pa in Pek ed.

*38 gzung ba...bzung ba in Pek ed.

*39 'khrul pa...vyabhicārin(vi)

*40 bstan ba...brtan pa in Pek ed.

*41 kyi...kyis in Pek ed.

*42 de ltar na...evam hi

*43 nyes pa...dosa, duṣṭ

*44 thams cad kyi thams cad du...sarvena sarvaṃ

*45 kyi...kyis in Pek ed.

*46 'jig rten gyi tha snyad...laukika-vyavahara

*47 gud na...gus na in Pek ed. =nyams pa

*48 rmi lam...svapna

*49 shin tu brtags...su-niścitam

*50 dben pa...viveka

*51 brgal bargol ba(pf), pravadin

[304-b-2] skur ba 'debs bspangs pa nyid kyis mtshan myid la mkhas pa yin na brtags pa dang yongs su grub pa dag la mkhas pa go skabs su ci 'bab ste^{*52}. gcig ni med pa nyid kyis rten cing 'brel par 'byung ba ma yin pa' i phyir la. cig shos de bzhin nyid kyis mtshan nyid kyang rtag pa'i^{*53} phyir ro. zhe na de ni [304-b-3] ma yin te. mtshan nyid la mkhas pa zhes bshad pa mtshan nyid ni 'dis mtshon pas na gzhan gyi dbang la kun brtags pa dang yong su grub pa tin te. 'ding ltar sems can ma dag pa rnams kyis ni brtags pa'i bdag nyid du dag pa rnams kyis ni bdag med pa'i bdag nyid du mtshon to. gzhan gyi dbang rang nyid ni mtshon par bya ba^{*54} yin pas na mtshan nyid de de nyid sbyar bar bya'o.

【4】

'di la thams cad kyis kun rdzob kyis bden pa bzhi dang don dam pa'i bden pa bzhi'o. de la 'jig rten gyi kun rdzob tu ni brtags pa la sgro yang mi 'dogs skur ba yang mi 'debs so. rigs pa'i [304-b-5] kun rdzob tu ni sems dang sema las byung ba'i ngo bo nyid gzhan gyi dbang la sgro yang mi 'dogs skur ba yang mi 'debs so. rtogs pa'i kun rdzob tu ni bden pa'i lugs ji ltar rnam par gzhag pa la mngon par zhen pa^{*55} nyid kyis sgro yang mi 'dogs la mngon par rtogs pa^{*56} dang mthun pa med par skur pa yang mi 'debs so. don dam pa'i kun rdzob tu ni ji skad brjod pa'i yongs su grub pa dag la sgro yang mi 'dogs skur pa yang mi 'debs te.

de bzhin du 'jig rten gyi don dam pa dang rigs pa'i don dam pa dang rtogs pa'i dan dam pa dang don dam pa'i don dam pas de kho na bzhin du sgro 'dogs pa dang skur pa 'debs pa spangs pa nyid sbyar bar bya'o.

[Der. ed. 304-b-7, Pek. ed. 366-b-8]

(2006年10月23日脱稿)

*52 skabs su ci 'bab ste...skabs bab(vi)、及時。当前。到時。一体どういうテーマが何という箇所に対応するのかというならば、という意味。VGPPV: 299-a-6参照。

*53 rtag pa...nitya

*54 mtshon par bya ba...lakṣya

*55 mngon par zhen pa...abhiniveśa

*56 mngon par rtogs pa...abhisamaya